

修士論文 要旨

2011年1月

## 高校生のいる家庭において動物飼育が家族機能に与える影響

指導教員 山口一教授

心理学研究科

臨床心理学専攻

209J4007

金子敏之

## 目次

|                 |   |
|-----------------|---|
| I 問題と目的 .....   | 1 |
| II 方法 .....     | 1 |
| III 結果と考察 ..... | 1 |
| 参考文献 .....      | 3 |

## I 問題と目的

近年、様々な種類の多くの動物がペットとして飼育されるようになり、人と動物の関係がもたらす様々な効果について様々な研究がされてきた。その結果、動物との関わりを持つことで抑うつが低下したことを示唆する研究（飯田ら,2008）や飼育動物が仲介役になり、家族間の対立を度抑えられ家族がよい雰囲気になった報告（Bridger,H. ,1876）など、飼育者個人のみではなく家族機能にも肯定的な効果を示す報告がされている。

ところで、高校生の時期は、社会的な側面において、これまでの家族中心の人間関係から友人中心の人間関係へと移り変わる時期であり、これまでとは異なった形の家族関係へと変化する。そのため、高校生の時期にいる子どもへ家族が与える影響は大きいと考えられる。

以上のことから、本調査では高校生を対象に、動物飼育と家族機能との関係を調査した。

また、本調査では仮説として、①動物を飼育している群の方が飼育していない群よりもコミュニケーションが増え、家族機能が健康的なレベルになる、②飼育群の中でも飼育動物への愛着が高い方が家族機能が健康的なレベルになる、③犬とその他哺乳類はその他の飼育動物よりも愛着が高く家族機能への影響も大きいということを挙げた。

## II 方法

埼玉県内にある公立の普通科高等学校3校に通う男女257名を対象に、2010年7月～10月の間に、各高等学校長の同意のもとに調査を行った。

調査に用いた質問紙は以下の通りである。

- ①フェイスシート：調査への同意・対象者の性別・年齢・家族構成・現在と過去の動物飼育の有無（飼育の場合は飼育動物の種類と飼育数、飼育期間、主な飼育者、1日に関わる時間）。
- ②Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei GakuinIV-16(Version3)（以下、FACESKGIV-16 (Ver3) とする）：Olson,D.H. (1990) の開発した円環モデルの「きずな」と「かじとり」の概念をもとに立木（2009）が開発した。
- ③コミュニケーション尺度：コミュニケーション尺度（黒川,1990）の第1因子を用いた。
- ④Lexington Attachment to Pets Scale（以下、LAPS とする）：Johnson,T.P. (1992) が開発した飼育動物への愛着を測定する尺度。
- ⑤家族関係単純図式投影法：水島（1978）の開発した家族関係を表現させる図式投影法。

## III 結果と考察

女性では、FACESKGIV-16 (Ver3) のきずな因子において、動物飼育群の方がきずなが適正レベルである人数が有意に多いことが示され、仮説①の一部が支持された。一方、動物飼育の有無とコミュニケーション尺度得点の関係は見られなかった。コミュニケーション尺度得点は家族の言語的なコミュニケーションとの関連が強い尺度であることから、動物飼育は、家族の言語的なコミュニケーションを増やす効果を通じてではなく、家族の協力が必要となり、家族同士が関わる機会が増え、飼育動物が共通の「趣味」となるといった効果を通じて、きずなを強めたと考えられる。

次に、飼育動物への愛着と家族機能の関係を見ると、動物への愛着である LAPS 得点が高いほど家族機能のきずなが高いといった関係が示唆され、仮説②の一部が支持された。矢澤の研究（2005）において、飼育動物を「パートナー」や「子ども」といった存在として見ている場

合に愛着度が高いことが示されており、現在飼育されている動物が、家族のメンバーとして擬人化されている可能性が考えられる。そのため、家族のきずなが高い人にとって、飼育動物のきずなも強く感じられるためだと考えられる。また、この関係は現在飼育群でのみ確認されており、動物を飼育することによる家族機能への影響は、永続的なものではなく、飼育している時期にのみ生じる影響であると考えられる。

第三に、犬とその他哺乳類を飼育している群ではその他の動物を飼育している群よりも有意に LAPS 得点が高い。また、家族のきずなが高いほど、犬とその他哺乳類を飼育している群の方がその他の動物を飼育している群よりも、有意に LAPS 得点が高いことが示されており、仮説③の一部が支持された。飼育動物への愛着は、飼育動物との交互作用を通して築かれ、哺乳類は、その他の魚類や爬虫類などと比べ直接接触し合う機会が多い。また、犬は群れで生活する動物であり、飼育者との親密な関係を築くため、飼育者からの働きかけに積極的に反応する。さらに、犬や猫が移行対象の役割を担う報告（井原,1996 森定,1999）があることから、移行対象としての役割を哺乳類が担っていると思われる。以上の理由から、哺乳類ではその他の飼育動物よりも有意に愛着が強くなったと考えられる。また、きずなの中群と高群において哺乳類が他の動物よりも愛着が高くなるといった結果から、哺乳類の方がその他飼育動物よりもきずなへ与える影響が大きいことが考えられる。

以上の結果から、動物飼育群では家族間のきずなが強いということがわかった。そのため、家族間の結びつきが弱いケースにおいて、家族の問題を解決する心理療法の1つのアプローチとして有効的ではないかと考えられる。さらに、本調査の結果は、家庭以外の場面における人と人との関係にも広げられると思われる。例えば、動物飼育の効果が期待できる場所に学校がある。学校は集団生活を行う場であり、クラスメンバー間の関係は児童・生徒の学校での生活に大きく関係していると思われる。そのため、動物飼育により、児童・生徒や教師間のきずなが適切な強さとなることは、学校での生活に肯定的な影響を与えられると思われる。

今後の課題として、本調査は高校生を対象としており、一般化することができるのかといった問題がある。また、結果として動物飼育が言語的コミュニケーションに影響せずに、家族のきずなに影響している事がわかったが、具体的な要因は不明であった。さらに、動物飼育が家族関係に影響しているものとして考察してきたが、本調査では明確な因果関係を示すことはできていない。そのため、今後もさらに調査を重ねる必要があると思われる。

## 参考文献

1. Bridger,H. (1876) The changing role of pets in society Journal of Small Animal Practice 17 pp.1-8
2. 井原成男 (1996) むいぐるみの心理学：子どもの発達と臨床心理学への招待 日本小児医事出版
3. 飯田俊穂 熊谷一宏 細萱房枝 栗林春奈 松澤淑美 (2008) 学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析 心身医学 48 pp. 945-954
4. Johnson,T.P. Garrity,T.F. Stallones,L. (1992) Psychometric evaluation of the Lexington Attachment to Pets Scale (LAPS) ANTHROZOOS 5 pp.160-175
5. 黒川潤 (1990) 円環モデルにもとづく尺度(和訳版)の標準化の試み—家族満足度、親-青年期の子どものコミュニケーション、FACESⅢについて— 家族心理学研究 4 pp.71-82
6. 森定美也子 (1999) 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在 心理臨床学研究 16 pp.582-591
7. Olson.D.H. (1990) Family Circumplex Model: Theory, Assessment and Intervention Journal of Family Psychology Special Issue 4 pp.55-64. (草田寿子 (1995) 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究 28 pp.154-162から間接引用)
8. 矢澤明子 (2007) 現代家族の特質とペットへの愛着との関係 立教大学教育学科研究年報 50 pp.113-157